

Dグループ

泉野小
齋藤 莉湖
(さいとうりこ)

若草小
折居 風香
(おりいふうか)

沼ノ端小
小野 友花
(おの ゆか)

清水小
石川 由菜
(いしかわ ゆな)

メンバー紹介

「人にやさしい車」について取材しました!

私たちDグループは、3月28日にトヨタ産業技術記念館で、自動車のユニバーサルデザインについて取材しました。

ユニバーサルデザインは1990年代に、米国の故口ナルド・メイス氏が、7原則を唱えたことが始まりです。7原則は、①公平な使用への配慮 ②使用における柔軟性の確保 ③簡単に正確な使用方法の追求 ④あらゆる感覚による情報への配慮 ⑤事故の防止と誤作動への受容 ⑥身体的負担の軽減 ⑦大きさや広さの確保の7点です。

ユニバーサルデザインとは、全ての人が快適に利用できるよう、デザインされた物の事です。トヨタ自動車では「聞く」「見る」「操作する」の3点で、ユニバーサルデザインの考えを取り入れています。



全ての人に使いやすいように!!

まず「聞く」に関する部分では、シートベルトをしていない時や道路の白線からはみ出そうになった時など、緊急の度合いに合わせて警戒音のなる大きさや高さ、リズムを変えています。

「見る」では、運転中は標識やスピードメーターなど多くの物を見ながらドライバーは情報を得るので、正確に素早く理解し判断できるように工夫されています。トヨタ自動車では、例えば「5」と「6」など、見間違いやすい字などは、隙間を空けたりして分かりやすいように、位置や大きさ、表し方などを工夫しています。

さらにユニバーサルデザインは、運転操作するハンドルにも取り入れられています。一部のトヨタ車のハンドルは少しだけ楕円形になっています。ハンドルの大きさと操作性が上がり、大きすぎると操作性が悪くなると、乗り降りするときにも邪魔にならないうまく、少しだけ楕円にすることで、操作性と乗り降りのしやすさを両立しています。



乗り降りしやすい楕円形のハンドル

メーターパネルにも見やすい工夫がされている!

みんなに快適なユニバーサルデザイン

また「聞く」に関する部分では、シートベルトをしていない時や道路の白線からはみ出そうになった時など、緊急の度合いに合わせて警戒音のなる大きさや高さ、リズムを変えています。

拓進小
矢野 世琉
(やの せる)

明野小
前川 道心
(まえかわ どうしん)

樽前小
山田 和佳
(やまだ わか)

美園小
野表 柚芽
(のおもて ゆめ)

メンバー紹介

「トヨタ自動車の歴史」について取材しました!



トヨタの車づくりはここから!

喜一郎が車をつくりたいと思ったきっかけは、1921年に欧米を視察した時にたくさんさんの車が走っている様子を見て、日本にも車が走る時代がやってくる予感したからです。その後1923年に関東大震災が起き、震災の復興に大きな役目を果たしたのが車でした。町の人たちの中で車の便利さが広がり、喜一郎の中でも車づくりへの思いが強くなりました。

1933年に入ると、豊田自動織機製作所内に自動車部を立ち上げて研究をはじめました。

初めて市販したのは1935年に完成したG1型トラックでした。計画から9カ月というスピードで販売にこぎ着けましたが、不具合が多発し改良を重ねました。2代目のトラックは3年後に完成、1938年に「トヨタGB型トラック」として販売されました。GB型は初代のもので異なり、トラブルも少なく、多くの支持を集めました。

はじめての乗用車は1936年に

私たちCグループは、トヨタ産業技術記念館でトヨタの歴史について調べました。

トヨタグループ創始者の豊田佐吉は、自身が開発した自動織機で特許を獲得しました。なかでもG型織機は世界から注目を集めました。トヨタ自動車を創ったのは佐吉の息子喜一郎でした。

トヨタ初の乗用車「AA型」



販売を開始した「トヨタスタンダードセダンAA型」になります。

自動車部ができて以降、みんなに受け入れられる車を大量生産するにはどうしたらよいかと研究し続けました。

1937年8月、トヨタ自動車工業株式会社が設立されました。そして翌年には自動車を一貫製造する挙母工場が完成しました。

数年後に戦争が始まり、軍用トラックしかつくれない時期もありましたが、1955年、喜一郎の情熱が詰まった初の量産型乗用車「トヨペットクラウン(RS型)」を発売することになりました。

9カ月でつくったトラック



トヨタでは現在、水素を燃料にした燃料電池車「MIRAI」を販売しています。電気エネルギーを利用し、二酸化炭素を排出しないことから、最先端のエコカーとして知られています。

トヨタグループは自動織機の開発からはじまり、国産乗用車生産を経て、今ではエコカーの生産をしています。これから先、さらに環境にやさしい車の生産が増えていくと、取材を通して私達は感じました。